

主の復活から昇天までの日々（聖レオー一世教皇の説教）

親愛なる皆さん、主の復活から昇天までの日々というものは、決して無駄に過ぎていった わけではありません。事実、これらの日々にこそ、大いなる秘義が確証され、大いなる神秘 が啓示されたのです。これらの日々にこそ、恐ろしい死の恐怖が取り除かれ、靈魂の不死性も公にされたのです。これらの日々にこそ、主が息を吹きかけられると、使徒たち全員に聖霊が注がれたのです①。さらに、これらの日々にこそ、すでに天国の鍵を与えられていた使徒聖ペトロは、他の使徒たちの頭として、主の群れの世話をゆだねられるのです②。これらの日々にこそ、道を行く二人の弟子に主が伴われ、わたしたちのあらゆる疑いの雲 を晴らすために、恐れおののいていた彼らの心の鈍さを叱責されたのです③。

こうして、主 に照らされたその二人の弟子の心は信仰の炎を宿し、冷えた心は主が聖書を説明して下さったとき燃え上がったのです④。そして、主がパンを割かれたとき、主と会食していた彼らの目が開かれました⑤。

… したがって、親愛なる皆さん、主の復活から昇天までの全期間を通じて神の摂理が配慮し、教え、弟子たちの目と心に勧めたことは、真に生まれ、苦しみ、亡くなられた主イエス・キリストが、真に復活したことを認めるようにということでした。十字架上の主の死を見て不安と恐怖に襲われ、主の復活を信じることをためらっていた 聖なる使徒たちやすべての弟子たちは、主が真に復活したことを明らかに見て、大いに強め られたのです。こうして、主が高みに昇って行かれるのを見たとき、彼らは悲しみに打ちひ しがれることは少しもなく、むしろ大きな喜びに満たされたのです⑥。

確かに、その喜びの 理由は名状しがたいほど大きいものでした。事実、聖なる人々の集いの面前で、人間の本性 が天上のあらゆる被造物の上に昇って行ったのです。天使たちの位階を越え、大天使たちの 座を越えて昇って行ったのです。そして、御父がもっておられる本性に御子において一致さ せられた人間性が、永遠の御父のそばに置かれた座に着き、その玉座で御父の栄光とともに あずかるまで、その人間性は高く高く、どこまでも高く昇って行ったのです。

① ヨハネ20・22参照

②ヨハネ21・15～17参照

③ルカ24・25参照

④ ルカ24・32参照

⑤ルカ24・31参照

⑥ルカ24・52参照

※聖レオー一世教皇教会博士(390年～461年11月10日:記念日:11月10日)

第45代ローマ教皇。在位:440年9月29日～461年11月10日。地方教会の改革や教皇権の強化などに努めた。教義論争でも異端説を排除し、正統論を確立した。451年カルケドン公会議を開催。

レオー一世が即位した頃のヨーロッパでは、ゲルマン民族の大移動による紛争の時代であったが、常に平和的な解決を図り、武力による解決を好まなかった。「大教皇」と称される。